

「日々の理科」(第1857号) 2019,-8,-9

「8月7日の浅間山の微噴火(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

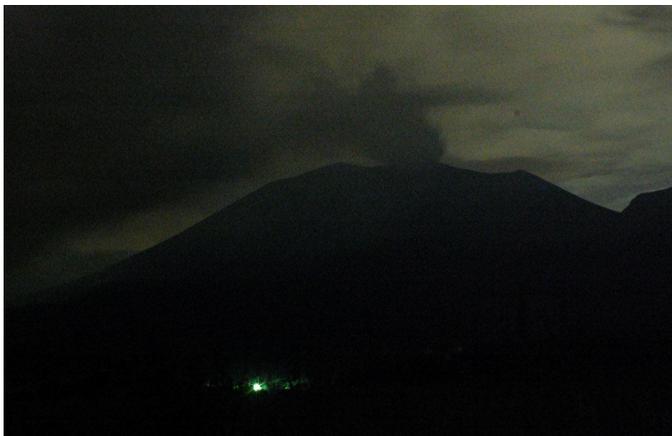
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

火口から弾道を描いて飛ぶ噴石(火山弾)は、風向きに関係なく四方に飛散する。しかし、噴煙(火山灰や火山礫など)の流れる方向は、山頂付近の高さに吹いている風向きに依存する。この方向のことを「降灰軸」と呼ぶ。噴火の時間帯、浅間高原の風向きはほぼ南西風(北東へ向かう風)だった。私は撮影に有利なのは降灰軸よりも少し西寄り、つまり山頂のほぼ北側と判断した。



私の山荘は地図のA地点にある。ここには定点観測カメラがあるのでそれに任せて、私はB地点(嬬恋村姥ヶ原)に向かった。浅間山麓を反時計回りに移動する形になる。



到着したのは23時過ぎで、噴火の一報から約1時間がたった。警備のパトカーや、地元の人や別荘の人の車で、道は結構往来が激しかった。



しかし、期待していた火山現象は、まったく写らない。普段の噴気と同じである。山頂から黒々と立ち昇っているのは、噴煙(火山灰)ではなく、噴気(水蒸気が凝縮したものや火山ガス)である。



通常、浅間は火山活動が活発になると、山頂付近に火映現象(かえいげんしょう)が観測される。写真は2004年冬の火映の写真だ。火口内の灼熱が、噴気や雲に反映して赤く染まるのである。



火映は、噴火後にも継続することが多い。写真は2009年2月の噴火後に現れた、強烈な火映だ。今回は噴火前も噴火後も、こうした現象が全く観測されなかった。マグマが上昇していなかったのだろうか?